トピックス

新千里東町における社会実験「ひがしまち　街角広場」

座談会出席者

赤井　直（あかい　すなお）　豊中市立中央公民館東丘公民分館分館長
歳脇儀一（さいわき　ぎいち）　新千里東町商店会理事長
辻本明子（つじもと　あきこ）　豊中市立東丘小学校校長
福岡正輝（ふくおか　まさき）　新千里東町自治会連絡協議会会長
吉村英祐（よしむら　ひでまさ）　大阪大学大学院工学研究科助教授

『ひがしまち　街角広場』オープンの経緯

建設省（現国土交通省）が平成12年（2000年）に行った「歩いて暮らせる街づくり事業」のモデルプロジェクトの対象20地区のひとつとして、千里ニュータウン内にある豊中市新千里東町が選定されました。選定地区の多くは活性化の問題を抱える中心市街地が占める中、新千里東町は「ニュータウン」として唯一選ばれた地区です。この事業で、住民・商業関係者・学識経験者・行政職員からなる「歩いて暮らせる街づくり調査検討委員会」が結成されました。また、住民に対するアンケートおよびヒアリング調査、ワークショップ、ホームページ開設などが行われました。

新千里東町は住宅全戸が集合住宅という、千里ニュ

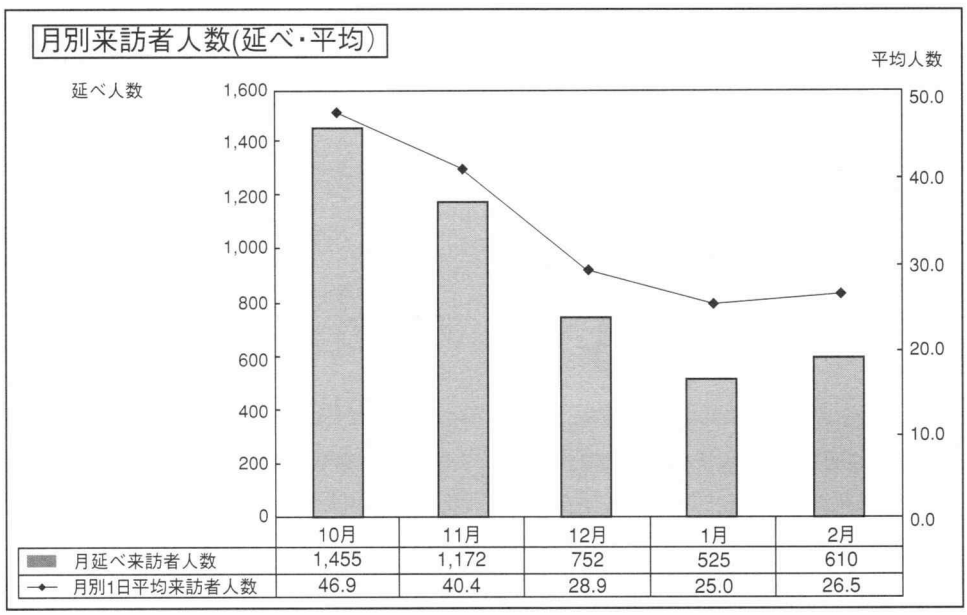
『ひがしまち　街角広場』オープン時のポスター

ータウンの中でも特徴を持った地区であり、豊中市内でも自治会活動などの盛んな地区です。「歩いて暮らせる街づくり事業」の取り組みを通じて住民の間のまちづくりに対する気運はさらに高まり、個々に広報紙を発行していた自治会連合会・公民分館・校区福祉委員会・地域防犯協会の4団体が合同の広報紙「ひがし

おか」を発行するようになりました。その気運を後押しするかたちで行政が支援を行い、新千里東町近隣センター（商店街）の空き店舗を活用した交流スポット『ひがしまち　街角広場』（以下、『街角広場』と記述）が、平成13年（2001年）9月30日に期間限定（平成14年2月末まで）でオープンしました。『街角広場』では、住民同士の交流のための喫茶スペースの提供や、イベントスペースの貸出が行われています。

『街角広場』が、住民相互の交流の活性化と千里ニュータウンの再生の関係を考えるひとつのきっかけや手がかりを与えてくれるのではないかと考え、関係者による座談会を開催しました。『街角広場』は新千里東町の住民にどんなインパクトを与え、近隣センターの雰囲気をどう変えたか、また、住民のコミュニケーションにどのような変化が生じたか、などを話していただきました。

『街角広場』内部のようす



『街角広場』来訪者数の推移（平成13年10月～平成14年2月）

座談会の概要

開催日時：平成14年（2002年）1月25日

開催場所：新千里東町『ひがしまち　街角広場』

進　　行：村上　馨（豊中市政研究所研究員）

『街角広場』がもたらしたインパクト

ー『街角広場』のインパクトはどんなものでしょうか？近隣センターの雰囲気はどう変わりましたか。

歳脇　空き店舗もある非常に寂しい商店街だったのですが、『街角広場』ができて様々な人が来られるので活気が出てきました。町のみなさんが和やかに楽しんでいる様子を見ると、良かったなと貸した立場からも感じています。今ご承知のように商売も冷えていますし、他の商店街を見てもシャッターが下りているところが多いです。それを思ったら、ひとつでも活気づいた場所が出来てよかったと思います。

ー運営を補佐する立場の福岡さんはいかがですか

福岡　ここは角地のどこから見ても目に付く場所。シャッターが下りて電気が消えた状態と比べたら、はるかに目で見て温かみがある、これがとても大切なのではないでしょうか。以前は子どもがこの辺で遊んでいるのを見たことがなかったけれど、今ではこの前が遊び場になっています。

ーまちづくりを研究されている吉村さんは、『街角広場』をどう思われますか。

吉村　『歩いて暮らせる街づくり』というテーマでいろいろ調査・研究してきましたが、もともと近隣センターは歩いて来られるように作られたところです。『街角広場』の試みは研究の成果を問う意味でも、良い機会だと思いました。オープン当初、最初はたくさんの方が来られても、そのうちに利用者が一桁になる日もあるのでは、と心配していたのですが、すぐに大丈夫だと確信しました。こういう場を皆さん求めていたのですね。この『街角広場』は全国で注目していますので、できるだけ続けていってほしい。また、それだけの力もあると思います。

来訪者は高齢者と子どもが中心

ーどんな方が来られていますか。

赤井　最初から今まで来ている方はほとんど変わりません。毎日来る方もいれば、遠路はるばるという方もいます。一番元気な方は毎日2回来られる80歳の方で、引っ越してきて1年ぐらいなので地域のことも知らないし、知り合いもいない。けれど、ここへ来るといろんな人の話が聞けるし、地域のこともわかるようになったとおっしゃってくださいます。来られる方は地域性から高齢の方が多いですが、子ど

もも来ますよ。学校帰りに「お水ちょうだい。」とか「お手伝いする。」と言ってお茶碗を洗い出す子もいて、そんな時は「ランドセルを置いてきなさい。」と一旦家に帰らせるようにしています。子どもはここで落書き帳を書いたり、おしゃべりしたりいろんなことをしていますね。

ーイベントではどんなことが催されるのですか

福岡　中での催しは絵や写真、手作り作品の展示です。絵や写真は自分で作品の発表会をしたいけれど、場所がない。ここはそんな方達のちょっとした小ギャラリーの役割を果たしています。明日から写真を展示する方は高齢の方ですよ。その方にとってはいい写真を撮ることや写真を見てもらうことが励みになる。そういう方が何人もいらっしゃいます。

赤井　イベントはいろいろ。冬に入って外が使いづらい状態ですが、街角コンサート等はよかったなと思いました。

吉村　大学で千里ニュータウンを課題に使わせていただいています。先日も学生達に千里中央に敷地を設定した設計課題“市民ギャラリーを有する多目的ホール”をテーマに質問事項を作らせ、住民の生の声をお聞きしたのですが、思わぬ意見が出てきて「これが社会だ。」とたいへん勉強になったようです。『街角広場』が存続できれば、こちらも定例化させていただきたいと考えています。

イベントのようす
第八中学校の生徒によるクリスマスコンサート

『街角広場』は、目的を持たずに行ける場所

ー辻本さんは子どもから話を聞いた事がありますか。

辻本　かなりの子どもがここに来るという報告を聞いています。子どもは脇目もふらずに帰るよりも、勉強を終えてホッとした時間ブラブラ帰ることがすごく楽しかったりするのですが、この地域の環境ではあんまり人に接触する場がなかった。お店屋さんもそんなにないですし。校区には公園がたくさんあって、他の校区より恵まれていますが、子どもは意外とそういうところより、誰か人がいるところがいいんですよね。人のにおいがするところに集まってきます。そういう面でこの『街角広場』はありがたい。いろんな世代を越え、多くの人と触れ合う機会になっていると思います。

ー地域の中で学校以外に行く場所がひとつ増えたということでしょうか。

辻本　この地域は集合住宅ばかりだから、ドアを閉めたら人が見えないので、自然な形で会話ができにくい。学校以外のところで人と触れ合っていくことは、とても大事だと思います。特にこの地域は子どもの数が少ないですから、子ども同士の関係はこれ以上広がらない。だから地域の

人とかかわることで人間関係が広がる。ここはそれを自然な形でできる場所だと思います。

赤井　先日、学校開放のときに、お父さんが学校に行っているのに子どもはここで遊んでいる。溝にボールはめたり、天井にボールが上がったから拾ってくれと言ったり、そんな遊びが子どもは楽しいみたいです。

辻本　この地域は遊ぶ環境が整備されていますが、それと遊びたい場所は違う。実際の子どもの気持ちとまちづくりがマッチする、というのは難しいなと思います。環境整備したからじゃあどうぞ、ということでもないのですね。

赤井　大人もそうだと思う。家へ直接帰ってもいいけれど、ちょっとここで一服することが楽しみだったりする。

福岡　場所が裏側だったらこんなに人が入ってなかったかもしれないですね。外に発信するときも、ただ空き店舗があったらいいですよとは言えない。将来建て替えたときもこういうスペースが欲しいけれど、単に空いたスペースではうまくいかない可能性があると思います。

新しく生まれたコミュニケーション

一人のつながりに変化はありましたか

赤井　顔は知っているけど話はしたことがない、そういう方もここでは一緒になって話したりします。新しく来られた方も昔話に耳を傾けるし、そういう人のつながりはできますね。それと、なんとなく地域から疎外感を受けている中学生もここへやってきます。そういう中学生も地域で見守っていかなければならないと思うのです。話し掛けてみると向こうも素直に応えてくれますし、道を歩いていたら「おばちゃん」と声をかけてくれます。

一今まで子どもから話しかけてくることはなかったのですか？

福岡　まあ、無理ですよね。道ですれ違うくらいでそんな関係ができるわけはなく、ここで何回も顔を会わせて、会話をして、それを積み重ねて深い話もできる。特に赤井さんが青少年健全育成会会長ということもあって必要以上にちょっかいを入れるから、よけいなじんでくるのでしょうね。スタッフには比較的年配の方が多いです

『街角広場』オープン前の近隣センター
あまり人通りがない

『街角広場』の外観
外のスペースに子どもがいる

が、長い間住んでいるけど、地域で何かやった経験がない。そんな人もここのスタッフとして入ってみて、初めて地域の人がわかったという話も聞きますしね。

赤井　ここへ来て近所の人と初めて話が出来た男性も多いですね。奥さんを亡くしてから定年になって、近所の人を誰も知らなかった方や、奥さんに引っ張られるように入ってきてはじめて地域の人と話をした方もいらっしゃって、これは男性の“地域デビュー”ですよね。ここはそういう事のきっかけにもなっていると思います。

歳脇　老人会に入っているのですが、そういう場での会話を見てみると儀式のようにズラッと机を並べてくだけた話が出来ない。人の話を発言もしないでジーッと聞いているだけで、四角四面になってしまうようです。でも、ここへ来ると「あの人どうしてる？」とか幅広い話が出来るし、皆さんとても和やかにしていらっしゃいます。

今後の『街角広場』

―期間は２月までということですが、その後も続けていきたいとお考えですか？

福岡　要望は多いですね。なくなったらどうしようと深刻に思っている人が多いですよ。

赤井　お年寄りの方は遠いところへ行けないし、「ここがなくなったら、家にこもるだけでボケるわ。」とか、「よけいに足腰がたたないようになる。」とおっしゃっています。

歳脇　新千里東町では近隣センター周辺の住宅や自治会が建替えを進めていて、近隣センターも建替えを検討していますが、今のところはそれがいつ頃になるか分かりません。お話したように『街角広場』に対する町の人の評判が良いので、これを今後の建替え計画の中に盛り込み、商店街が東丘の情報発信基地の役割を果たすようになれば、と思っています。

福岡　ここが地域の人に本当に喜ばれているし、われわれ自身もなんとか続けていきたい。でも、一方的なこちらの思いだけでは、お借りしている条件からいっても商店会の皆さんに負担がかかる。われわれが協力できることといったら、地域の人に気持良くここへ来てもらうことぐらいです。

吉村　子どもの話で申しますと、ここで叱られたり、遊んだり、勉強したりする体験は、かなり心に残ると思うのですね。彼らが大人になって帰ってきたときに、昔ここで怒られた体験があれば、それは長い目で考えて、ここに近隣センターがあるということを心の深いところで憶えてもらうことになるのではないでしょうか。

『街角広場』は千里ニュータウンのお寺のような存在

―印象に残っているエピソードがあれば、お聞かせください。

赤井　ここは駆け込み寺的な要素もあるようです。去年、仕事がなくなって電気もガスも止められて困り果てた方が、「お湯をください。」と言って来られました。それから毎日お湯をもらいに来られ、いろんな話をしました。最後には「仕事

が見つかったので、お湯をもらいに来るのは今日でおしまいです。ありがとうございました。」と言ってくださいました。

福岡　自暴自棄になっていたのでしょうね。あの時誰とも話をする機会がなかったり、あるいは、人の温かみも何もわからないまま放置されていたら、あんまりいいことは考えなかったのではないかな、という気がするんです。

赤井　昔はお寺に誰でも気楽に行けて、そこではいろんなことを言っても外に洩れないという安心感があった。ところが、千里ニュータウンにはそういう場所がない。この『街角広場』がそんな役割を担っているのではないかと思います。相談事ではなく無駄話が多いかもしれませんが、人間にはその無駄話のできる場所が生活の中で必要だと思います。それは大人も子どもも同じではないでしょうか。

ーどうもありがとうございました。

座談会を終えて

持ち寄った不揃いのカップ、譲り受けたテーブルと椅子、廃物利用の食器棚、床に描いた千里ニュータウンの略地図…。『街角広場』は手作りのぬくもりを感じる空間でした。前のスペースで子どもが遊ぶ光景からは、以前に同じ場所で中学生が喫煙し、単車が走り回っていたことが信じられませんでした。近隣センターに人の気配と活気が生まれ、子どもや高齢者が安心して立ち寄れる場所、新しいコミュニケーションの場

座談会のようす（左2人は進行役とスタッフ）

ができた点で、『街角広場』の試みには意義があると感じました。

座談会の中で伝わってきたのは、関係者のみなさんの熱意です。『街角広場』をきりもりする赤井さん、サポートする福岡さん、スペースを提供する歳脇さん、少し距離を置いて見守る吉村さん、子どもの視点で『街角広場』を考える辻本さん…。印象的なエピソードの数々は、その熱意に惹かれた来訪者が生んだものです。その多くに赤井さんがかかわり、彼女目当てで『街角広場』に来る人も多いようです。月曜から土曜までほぼ毎日『街角広場』でコーヒーを入れ、来訪者と話をする真摯な姿に頭が下がりました。

また、みなさんが何度も口にされていた「地域」という言葉も印象に残りました。辻本さんの発言のとおり、新千里東町は全戸が集合住宅のため「うち」と「よそ」が壁1枚で厳然と隔てられています。さらに、道路や公園が整備されている反面、それぞれの用途が明確に定まっていて、何となく「たまる」ことができる、「まったり」とできる場所がありません。このことは新千里東町で端的に表出していますが、社会全体を見ても同様のことが言えると思います。伝統的な日本家屋には家の中と外をつなぐ縁側があります。縁側

は外に向けて開放され、玄関より縁側から家人に声をかけるのを好む来訪者もいます。誰でも気軽に行け、お茶を飲みながらたわいのない話ができる『街角広場』は、人と人、人と地域をつなぐ「縁側」の役割を果たしていると感じました。個人の客として喫茶店に行くのではなく、来訪者として『街角広場』に立ち寄ることで、誰かと同じ空間や時間を共有している実感がわきます。そういった肩肘の張らない気軽な関係から、新しいつながりやコミュニケーションがひろがっていくように思います。

「縁側」と『街角広場』の違いは、前者が個人宅の一部で来訪者は専ら家人を目当てに来るのに対し、後者は地域の財産で、来訪者が不特定の人と出会える点です。「広場」は特定の人と会い、集うために行く場所というよりは、「誰か」に会えるかもしれない、「何か」が見つかるかもしれないという期待、あるいは新しいこと、おもしろいこと、珍しいことに出会えるかもしれないという期待を持って行く場所です。そこでの出会いや発見が持続し、つながりながら発展すれば、相談事や無駄話に加え、希望についても気負いなく語り合える空間や関係が形成されるのではないかと思いました。

そのためには現在の「好意により提供された場所で、ボランティアが運営する喫茶スペース兼貸しギャラリー」から脱皮する必要があります。その鍵は運営資金の確保やルール作りかもしれませんし、スタッフの組織化かもしれません。特定の人に負担が集中することなく持続できる仕組みを考え、実践することが重要だと思われます。運営の方法をうまく確立し、継続することができれば、『街角広場』は情報発信も行う双方向のコミュニケーションの拠点となり、地域に面としてのひろがりを与えながらコミュニティの活性化を牽引していくことができるのではないでしょうか。

＜注＞

本文中の記述は、座談会の開催された平成14年（2002年）1月末の状況に基づくものです。『街角広場』は、3月以降も同様の利用が継続されることが決定しています。お忙しい中ご出席いただいた方々に改めて感謝の意を表します。

（文責：村上　馨）